

『カンボジア王国基礎教育調査』

教育学部・国際協力推進プラットフォーム連携プロジェクト

『アジア地域における国際教育協力事業 - カンボジア王国 Siem
Reap 州教員研修支援のモデル構築に関する研究 - 』

実施視察報告書

(平成23年6月)

教育学部

和泉研二、友定保博、海野勇三

目 次

I	はじめに ～本プロジェクトの経緯と概要～ 和泉 研二	1
II	訪問先別の調査・活動概要 和泉 研二	2
III	観点別に見た現状と課題 ～保健衛生・安全を中心に～ 友定 保博	1 5
IV	カンボジアの子どもたちに学校体育を — 私たちに何が出来る？現地ではどんな支援が求められているのか？— 海野 勇三	2 4
V	今度の課題と展望 和泉 研二	3 4
	謝辞	

I はじめに ～本プロジェクトの経緯と概要～

和泉研二

国際貢献は大学に課せられた重要な責務の一つである。教育学部に期待される国際貢献としては、必ずしも満足できる水準に至っていない途上国の学校教育を、学部が有する長年の学校教育や教員養成に関する経験と実績を活かして、現地の関係者と協働で改善することであると考える。そこで、平成20年度に、カンボジア、ベトナム、バングラディシュ等、アジアの途上国の教員養成や学校教育への支援を目的に、学部内の有志により「教育国際支援プロジェクト」チームを組織し、以下の活動計画に基づいて活動してきた。

第1段階：途上国の教育について情報収集を行うとともに、現地に赴き現状を観察分析し、課題を発掘する。

第2段階：現地の状況により適した教員研修支援の在り方を検討するため、現地の小学校において支援の試行を実施する。

第3段階：以上の準備期間を経て、国内外の行政機関、JICA、NGO等と連携をはかりながら教育に関する国際支援プロジェクトを計画し実施する。

これまでの活動実績としては、国際協力推進プラットフォームとの連携により、プロジェクト「カンボジア王国の学校教育と教員養成の現状と問題点に関する現地調査」を実施し、平成21年度には、阿部弘和、和泉研二（以上、理科教育選修）、小粥良（国際理解教育コース）が、平成22年度には石井由里（国際理解教育コース）が現地に赴き、課題発掘調査を行ってきた。

本年度のプロジェクト「アジア地域における国際教育協力事業 — カンボジア王国 Siem Reap 州教員研修支援のモデル構築に関する研究」は、上記活動計画の第1段階から第2段階へ至る段階にあたるプロジェクトである。具体的には以下の3つの活動を実施した。

- (1)本年度から教科となった体育を中心に、カンボジアの学校教育事情の調査。
- (2)これまでのプロジェクトを通して信頼関係を構築したカンボジア王国Siem Reap州のワット・ボー小学校において、学校保健に関する現職教員を対象とした講習会の実施。
- (3)カンボジア王国が国策として充実を図っている理科の模範授業の試行。

II 訪問先別の調査・活動概要

和泉研二

プロジェクトによる現地訪問のための旅行期間は、2011年3月5日～3月12日である。ベトナムのハノイ経由でカンボジアに渡航し、シエムリアップ（Siem Reap）州を中心に活動を行った。主な訪問先と調査・活動の概要は以下の通りである。

1. チョンクニエス（CHONG KHNEAS）村の小学校、保健センター

日時：3月6日（日） 場所：トンレサップ湖周辺

主な活動：校舎見学、保健センター見学、生活環境・衛生状態視察

シエムリアップ中心部から車で30分ほどのチョンクニエス村にあるトンレサップ湖は、水上で生活し、漁業で生計を立てるベトナム系の住人が多い、カンボジアでも貧しい地域である。しかし、2年前に訪れたときとは比べ物にならないほど観光化が進み、さらに大規模な工事が行われていた。

日本のNGO法人の一つであるJSAC (Japan Assistant Team for Small Arms Management in CAMBODIA) が2005年に建設したチョンクニエス小学校は、もともと移動式大型船であり、いわゆる湖上学校であったが、今回の訪問では、雨期の岸辺の位置に固定された学校になっており、移動しない学校となっていた。また近くには新しく中学校も建設されていた。

なお、小学校の隣には、村の保健センターがある（詳細は次章）。また、湖上には、韓国の支援による湖上学校が目についた。



トンレサップ湖の水上住居



固定されたチョンクニエス小学校
(中央は日本の援助、手前の緑の建物は韓国の援助による。)



小学校に隣接してできた中学校
(陸地に固定)



学校に隣接する村の保健センター



保健センターの受付



韓国支援の湖上学校

2. シェムリアップ 初等教育教員養成学校

(Siem Riap Provincial Teacher Training Center (PTTC))

日時：3月7日(月) 場所：シェムリアップ市街地内

- 主な活動：1) PTTC 校長、LeavOra 氏からの聞き取り調査
- 2) JICA 派遣の青年海外協力隊員(JOCV)、小八重桂子隊員
(理科担当、静岡県農業高校の現職教員)、渡辺大地隊員
(体育担当)からの聞き取り調査。
- 3) PTTC 校舎、教室、設備、授業の見学
- 4) 附属小学校校舎、教室、設備、授業の見学
- 5) 食堂・売店、運動場等、環境・衛生状態視察

カンボジアの小学校教員は、全国の各州および特別に設置された18校の

PTTCにおいて、2年間で養成されている（中学校教員は6校の前期中等教育教員養成校（RTTC：Regional Teacher Training Center）で養成されている）。

シェムリアップ PTTC は1学年250人ほどで、3月現在で合計509人（内女性318名）の学生が教員になるべく勉学に励んでいた。スタッフは48人（内女性14名）で、その内、教員は25名。校長の話では、日本など海外からも支援があるが、もう10人ほど欲しとのことであった。

校舎は新しく立派である。ベルギーや日本からの支援も受けている。ちょうど日本の大使館のプロジェクトの一貫として、理科室となる建物が建築中であった（2011年6月完成予定）。シェムリアップ PTTC の入学試験の倍率は10倍程度。2011年度からは高校卒業が条件となるが、内戦後の教員不足が解消していないため、今までは必ずしも高校を卒業していなくても入学が可能であった。遠方の学生のため寮も併設している（定員147人）。



校長からの聞き取り調査



PTTC の校舎



PTTC の授業

理科の教員は5人で、2人は専任とのことであった。1年時には週2コマで講義や実験等を中心とし、2年時には週1コマ、指導案の作成などを行うそうである。内容的には日本の中学校レベルであり、PTTC の教員も物化生地に分かれてはいなかった（RTTC では各専門の教員に分かれている）。

現在の理科室は、電気・ガス・水道は使えない。準備室はなく、わずかな器



建築中の理科室



現在の理科室（多少のガラス器具が右の棚にある。机は新しいが普通教室用で、電気、ガス、水道は使えない。）



ペットボトルを利用した天秤



生物顕微鏡



1台ある冷蔵庫中のアルコールランプ



英語のポスター（人体の成り立ち）

具が棚にあるのみであった。カンボジアの理科は生活科や保健に関する内容が含まれている。壁には人体に関するポスターがあった。

PTTC は学費を含めすべて無料。教員採用試験はあるが、希望すればほぼ全員教員になれるようだ。教育実習は2年時に一か月間実施される。採用後の何

年間には指定された小学校での勤務が義務づけられている。小学校教員の給料は全国一律の基準によって支給されるが（ドル換算で50ドル以下程度（40～30ドル程度とのこと）、これではカンボジアでも生活することが苦しいため、ほとんどの教員は副業をもっている。副業しないと暮らしていけないため、特に、副業を探せない田舎では教員の定着率が悪く、低賃金が教員不足の解消を難しくしている要因の一つとなっている。シェムリアップ PTTC からは毎年120～150人程度しか教員になっていない（1学年250人中、6割程度）。全国では毎年1500人くらいの小学校教員が不足するそうで、不足分は契約教員で賄っている。

附属小学校も敷地内に併設されている。各学年2クラスで、1クラスの人数は40人であった。附属学校に通っている子どもは地域のものであり、選抜ではない。現在、カンボジアで小学校に通う子どもの割合は、93～95%に達している。2015年には100%を目指すそうである。カンボジアでは小学校は2部制であり、子どもも教師も、一ヶ月交代で、午前（7時～11時）と午後（13時～17時）で入れ替わる。



PTTC 附属小学校



JICA 派遣の渡辺隊員（中央）と
小八重隊員（右）

3. ワット・ボー小学校（Wat Boo）

日時：3月7日（月）、9日（水） 場所：シェムリアップ市街地

主な活動：

7日 1) 表敬訪問

- 2) 講習会・理科授業実施打合せ会議出席
 - 3) 校舎、授業、音楽隊活動視察
 - 4) 日本人ボランティアとの面談
- 9日
- 1) 学校保健講習会の実施
 - 2) 理科模擬授業の実施

カンボジアの小学校は、教育青年スポーツ省（Ministry of Education, Youth and Sport）の管轄下にあるが、各学校の校長の権限・手腕による学校独自の運営もかなり行われており、ワット・ボー小学校は、保護者や地域からも高く評価されている。児童数は約10年間に20倍を超え、3月時点では約5000人の大規模校である。ワット・ボー小学校へは、平成21年度のプログラムではじめて訪問した学校であるが、その後も交流を続けており、本年度2010年12月には、プン・キムチェン校長、田中千種校長補佐、マー・パーラー教諭の3氏を山口大学に招き、日本の学校教育に関する研修も実施している。

学校保健の講習会は、友定によって午前と午後の2回実施した。ほぼ全教員



歓迎式を兼ねた打ち合わせ会議



学校保健に関する講習会

にあたる約80名が受講した。カンボジアの教員の学校保健に対する意識はまだまだ低い、危険箇所を予見して事前に事故を防止することの重要性や、実演を交えた応急措置の方法など、熱心に受講していた。

理科授業は、マー・パーラー教諭が担任している5年生のクラスにおいて、和泉が実施した。カンボジアの小学校の授業は、はじめに教科書を読み、そのあと教科書にどんなことが書いてあったかを質問するといったパターンが多い。理科も同様であり、観察・実験はほとんど行われていない。また、問題解

決型学習についてもほとんど認識されていないようである。そこで、今回は、カンボジアの小学校には理科室がないこと、普通教室には、電気、ガス、水道がないこと、机は椅子と一体となった長机で、移動が難しいことなどを考慮しつつ、カンボジアの教室でできる観察実験であり、実験を通して課題を解決できる授業として、磁石を用いた模擬授業を実施した。

カンボジアの子どもはかなり興味をもってくれたようだ。よく手を挙げて発言もしてくれた。理科に関する興味関心は、日本の子どもに負けない印象である。実験道具はすべて寄贈したが、マー・パーラー教諭をはじめ、後ろで聴講していたが数名の教員が理科授業における観察実験の意義を理解し、少しでも役立てて欲しいと願っている。こういった模擬授業を繰り返し実施することが、カンボジアの現職教員の意識改革を進める一つ的手段であると考えている。

訪問時には日本人ボランティアとして、神奈川県立保健福祉大学4年の長澤



課題解決型理科授業の実践



授業を行ったクラスの子どもたち

涼子氏、吉田智香氏、山口大学教育学研究科1年の斉藤翔氏が滞在していた。斉藤氏（右上写真の最上段右側）は、昨年12月に教育学部のちゃぶ台研修として実施したワット・ポー小学校長の講話を聞いたことがきっかけで、自費渡航した。プロジェクトの成果の一つと言えよう。

4. トルロピアン・宮下小学校訪問

日時：3月10日（木） 場所：シェムリアップ州郊外、プク郡

主な活動：1) 校長との面談

2) 校舎、授業、施設の見学

トルロビアン・宮下小学校は、栃木県宇都宮市の宮下眼科医院理事長宮下浩氏による寄贈小学校であり、児童数229人(女子103人)、各学年6クラス、教員6人の小学校である。田舎の学校ではそうであるが、この小学校の敷地は牛よけの鉄条網で囲われていた。そのためか、サッカーボールやバレーボールは破れたものも多く、子どもたちは破れたまま使用していた。井戸はあったが、ポンプはなくなっていた。



トルロビアン・宮下小学校



授業風景（机と椅子が一体型の長机）



校庭で遊ぶ子どもたち
(鉄条網で囲まれている)



上部がなくなった井戸

5. パックパン小学校訪問

日時：3月10日（木） 場所：シエムリアップ州郊外、プク郡

主な活動：1) 校長との面談

2) 校舎、授業、施設の見学

パックパン小学校は、児童数212人（女子104人）教員5人の小規模校である。校舎、井戸、黒板などは、トルロビアン・宮下小学校などと同様、各国の支援によって整備されている。菜園やガーデニングにも力を入れており、小規模校ながらきれいな学校であった。

カンボジアの小学校には日本の小学校のようなグラウンドはほとんどない。校庭の一角ではバレーボールが行われ、芝生の広場では、ペットボトルを利用して日本の缶蹴りのような遊びを楽しんでいた。



前庭で遊ぶ子どもたち



水汲みをする様子



バレーボールを行う子どもたち



裏庭の一角にある菜園



裏庭で遊ぶ子どもたち



前庭の花壇

6. ササースダム郡中核学校訪問

日時：3月10日（木） 場所：シェムリアップ州ササースダム郡

- 主な活動：1) 校舎、教室、設備の見学
2) 幼稚園から高校の授業見学
3) 校内売店、井戸、図書室等の見学

ササースダム中核学校は、幼稚園から高校までが揃っている。小学校の児童数は732人で、各学年3クラス、教員数は20人である。郡の中核学校として、近隣の学校（サテライト校）の現職教員対象に実施される、各種の研修会場ともなっている。ここでは、JICAとカンボジア政府による「カンボジア復興支援プロジェクト」が実施され（平成19年終了）、広島県と広島大学の教育関係者によって、学校経営や教科指導法などの研修が行われた。現在も広島や、シェムリアップPTTCにあるベルギーのプロジェクトオフィスから定期的な支援が行われている。

校舎や井戸は、ベルギーの支援によって建設された。校舎の前には広場がある。机と椅子は新しく、カンボジアの学校には珍しい分離式を採用し、机を寄せ集めたグループ学習も行われていた。図書室は小さいが新築されていた。本を借りるとき、貝殻を自分の学年の缶に入れるようにし、各学年の貸し出し数を把握していた。

カンボジアでは留年は珍しくない。また、家庭の事情で一旦学校を離れた後、しばらくして戻ってくる場合も多いので、年齢が異なる子どもが同じ学年にいる場合も多い。兄が下の学年というような場合もある。



幼稚園（正面）と小学校（左端）



校庭とポンプ（ベルギーの援助）



小学校の机と椅子（分離式）



図書館の外観



貸出し数を貝殻でカウント
（学年ごとの缶に入れる）



バレーボール等の保管状況

7. SPITLER（スピッター）小学校

日時：3月11日（金） 場所：シェムリアップ市郊外

主な活動：1）校舎、教室、設備の見学

2）授業見学

スピッター小学校は、2005年に米国のスピッター氏により設立された。児童数約500人、10クラス、教員数11人のほか、各国からのボランティアが活動していた。訪問時には、オーストラリアから来た Chiistina Lie 氏と、ドイツから来た Kolja Winbeck 氏が案内してくれた。

シェムリアップから外れ、悪路を30分ほどかけて行った全くの田舎にある学校であるが、英語教育に力を入れ、実力ある教員を揃えているとのことであった。アンコール子ども病院から定期的に訪れる医師の健康診断、貧しい家庭

に食料援助、道路整備、環境美化活動なども実施していた。今回訪れた中では一番田舎ではあるが、特色ある学校運営を行っており、この地域の子どもたちにとって、この学校ができた意義は非常に大きいことは容易に想像される。



小学校の外観



英語の音楽で歓迎する子どもたち



中庭と外国人教師



自家発電機

8. ワット・チャオ (Wat Chao) 小学校

日時：3月11日（金） 場所：シェムリアップ市郊外

- 主な活動：1) ワット・ウォントン校長との面談
2) 校舎、教室、設備の見学
2) 授業・活動調査（主に体育、家庭、アーツ）

カンボジアの小学校の教科は、国語（クメール語）、算数、理科、社会、体育である。体育は昨年度まで、社会の中に含まれていたが、本年度から正式な教科となった。（社会科は家庭科やアーツを含み、理科は保健や生活科の内容を含

んでいる。)

ワット・チャオ小学校は、シエムリアップ州に4校ある、体育の研究指定校の一つである。週に2時間、体育の教員が来て授業を行う。指定校には JICA から指導員が来て、体育の授業の実施に備えた研修を実施したそうである。体育の内容は、サッカー、バレー、バスケット、陸上、体操など多岐にわたり、指導書も出来上がっていた。



体育関連設備



学校のサッカーチーム



各種大会で獲得したトロフィー



図書室



伝統舞踊（アプサラ）の授業



家庭科の授業（正規には社会科の一部だが、独自に力を入れている）

III 観点別に見た現状と課題 ～保健衛生・安全を中心に～

友定保博

1. 地域の保健・医療施設

多くの人が水上生活をおくっているトンレサップ湖。観光スポットとしての整備・開発が進められていた。その麓の村に係留されていた保健センターの建物（左）。入るとベッドが2つに、赤ちゃんの体重をはかるための青いかごが秤にぶら下げられていた。（右）そして奥には産褥室もあった。助産師は常駐していないが、ここで月に8件ほど出産することもあると言う。



村にあったカンボジア生殖保健協会の建物

手すりには「Orasel KIT」の宣伝幕が見える。（左上）これは2004年WHOとユニセフによって推薦された低浸透性経口補給塩（ORS）の2つの小さい袋と亜鉛処置（20mgの10枚のタブレット）を組み合わせた、5才未満の乳幼児の下痢による脱水症状を治療するためのもの。カンボジアの Pursat と Siem Reap 地区では、その普及を図るため、助成金が支給されているらしい。Siem Reap で Orasel KIT を配布するのは、Reproductive and Child Health Alliance

(RACHA)、日本でいえば母子保健センターであるが、今回の視察では訪問できなかった。



村にあった薬局を兼ねたクリニック。店先でご婦人が治療を受けている。(左) その真向かいにも薬局があったが、公設・私設の違いがあるようだ。

2. 学校施設・環境衛生

学校の建物は海外からの支援で、新しく建て替えられたものが多かった。



日本人の支援で建設された小学校

ワッチャオの中学生は旧来の教室で勉強をしていた。暗いが涼しそうだった



教員養成学校で建設中の建物
鉄筋は入っていたが柱の細さが気になる。

ワットボー小学校の増築中教室。
いずれもレンガ積み。

教室環境は、電力不足のため照明器具はなく暗い。乾季・雨季がある気候風土に関係するのかもしれないが、教室の窓は2つが多かった。しかも雨戸が閉められ室内の照度に差が生じていた。特に黒板面の照度不足が気になった。日本の学校環境衛生基準では「教室及びそれに準ずる場所の照度」の下限値を300ルクスとし「教室及び黒板の照度」は500ルクス以上であることが望ましい、となっている。



机・いすは連結式のものがほとんどであった。身体の大小にかかわらず同じ高さであるため、ほとんど立った状態で授業を受けているなど、気になる姿勢の子どもも見られた。



ノートの代わりにボードと「消し布」



自分の小学校時代のように、教室はどこも「満員御礼」

3. トイレ事情

ワットポー小学校の男子トイレ。手洗い場所のように見えるが、上段の中央に溝が作られ水で流すようになっている。



ササースダム郡の小学校にもトイレが設置されていた。大便の際は使用後、左の水槽から柄杓で水を汲み流す方式。かつての日本での衛生状況がそうであったように、村にとって学校は文化の最先端。安全な飲料水、トイレの設置、手洗い習慣など学校生活環境を整え、それが家庭・地域への啓蒙的な役割を担うのである。



4. 学校でのけがの防止と救急処置の実情

各学校には米国国際開発局 United States Agency for International Development (USAID)等から寄贈された救急セットはあった。日常的に使われている様子はなかった。



ササースダム郡の小学校で、救急処置について尋ねると、校長が事務室に案内してくれ、片隅にあるセットを見せてくれた。あまり使用されている様子はみられず雑然と置かれていた。薬の使用期限や保管状態など清潔・安全の観点からも問題が多い。なお、ワットボー小学校においても同様で、寄贈されたジュラルミンケース入りの救急セットが2つ、部屋の片隅に置かれていた。

ワッチャオ小学校の救急セットは校長室の壁に設置されていた。誰が処置をしているのかを尋ねると、以前に講習を受けたことがあるという校長先生自身であった。



救急セットは配布されても、救急処置の実習は行われていない。今回、ワットボー小学校の校長先生の依頼で、「けがの予防と手当て」について午前と午後の2回にわけて教員対象に話をしました。日本の小学校保健教科書に載っている危険予知の教材に、先生方も考え夢中で発言という場面もみられた。ただ、実習を行う時間的余裕がなかったのは少し残念であった。

ワットボー小学校では校舎の増築工事が行われていたが、立ち入り規制の柵等はなく、子どもたちは瓦礫の上で遊び、そばではサッカーに興じ夢中でボールを追いかけていた。

ワットボー小学校では、ほとんどの子どもが靴をはけるようになったことも、家庭・地域生活でのけがを予防することにもつながる。同時に、行動が自由になりケガが増える



ササースダム郡の小学校では、まだサンダルが多く、草地の上を裸足で気持ちよさそうに遊んでいた。



5. 飲料水事情

ガイドブックにも飲料水への注意があり、毎日ペットボトル持参での行動であった。食事の時も、「この店（の水・氷）は大丈夫？」と確認。（ちなみにビール党の私にとって、氷をどんどんジョッキに入れられる飲み方には閉口）

ササースダム郡の小学校では、井戸で水を汲み、濾過機でゴミを除去し、水がめに溜め、給食の調理や飲料水として使用（下部および次頁上の写真）。





シェムリアップ州の教員養成学校の職員室には、飲料水のボトルが用意され、使用されていた（左下）。附属の小学校の教室では、机の上に子どもが持参した飲料水のボトルがみられた（左下）。



ワットポー小学校では校庭に蛇口付きの水道が設置されていた（左下）。子どもは通学リュックに飲料水ボトルを持参しているようである（右下）。



通学リュックの横ポケットに
ペットボトルが見える

トンレサップ湖での飲料水（下部写真）



湖上に浮かぶ住宅群



湖上の浄水施設



水がめの水を飲む子ども



ポリタンクは飲料水？

6. 交通事情

これから心配されるのは交通事故の増加である。移動手段の中心はモーターバイクであり、観光客を乗せるトゥクトゥクや子どもたちの自転車も多く走っている。信号もほとんどなく、もちろん横断歩道など歩車の区別のない道路が多い。



車内から見た交通状況。3人乗りは普通らしい



数少ない信号



トゥクトゥクと、それを追い抜く自動車

自動車・バイクに乗員制限や速度制限はないみたい。とくにバイクの3人乗りは普通。ちなみに田中先生は子ども4人をバイクに乗せ、帰宅の途につきました。ヘルメットはドライバーのみ義務づけられているらしい。乗用車はドライバーのシートベルト着用は取り締まりが行われ、罰金を払っている場面もみた。ワットポー小学校には遠方から通う児童も多く、保護者負担で私設のマイクロバスが10台ほど駐車していた。その座席は細かく6列に区切られ、30~40人乗り。授業は半日で午前組と午後組の児童がいるため、ドライバーは1日2往復の仕事。



村の小学校の自転車置き場

IV カンボジアの子どもたちに学校体育を

— 私たちに何ができる？ 現地ではどんな支援が求められているのか？ —

海野勇三

この度、学部長裁量経費による助成と国際教育協力プラットフォームからの支援をうけて、カンボジアへの視察調査に参加する機会を得た。私自身の最大の関心事は、カンボジアの子どもたちの「生活」と「学び」と「育ち」の現状について、五感をフルに動員してしっかりと感じ取ってくることであった。何のために？ それはタイトルに示した通り、「カンボジアの子どもたちに学校体育を提供したい」との強い思い、「ゆきとどいた学校体育を」とまでは望まない（望めない）が、せめて「必要にして最低限度の学校体育」をカンボジアの子どもたちに提供したいと考えてのことである。

言うまでもないが、「提供する」のは現地の学校であり、教職員集団であって、私たちにできることはそれへの「支援」と「協力」にとどまる。しかし、その「支援」と「協力」は、現地の実情を踏まえ、当事者の必要とマッチングしたものでなければならないこともまた当然である。その意味で、今回のカンボジア視察調査は、今後の私たちにとって、どんな「支援」と「協力」が可能なのかを構想し、行動に移していくための第1歩、いわば探索的調査であった。以下、概要を報告する。

1. 検討の視点の確認

初めに、カンボジアの学校で教育活動の一環としての「体育」が実施され定着していく上で、どのような条件が整えられる必要があるのか？ このことを確認しておきたい。

1) 学校体育の構造

学校体育という時、そこには①教科の体育授業、②運動会などの体育行事、③教科外の運動クラブ活動の3つの領域がある。したがって「カンボジアの子どもたちに学校体育を」は次のように言い換えてもいいだろう。

- ①「カンボジアの子どもたちに体育の授業を」
- ②「カンボジアの子どもたちに体育行事を」

③「カンボジアの子どもたちに運動クラブ活動を」

2) 教育条件

次に、上述の①～③が現地の学校で実施され、定着していくために求められる条件を主体的条件と客観的条件に仕分けして確認しておこう。

主体的条件：学習の主人公である子どもたち、教える主体である教師、そして教育活動をプランニングしたり、全体を調整したりするコーディネーターなど、いわゆる人に関わる条件である。

客観的条件：運動やスポーツをするための道具、施設、時間、運動やスポーツそのものの行い方やルールに関する知識および指導内容や指導法に関する知識等の情報であり、いわゆるカネ・ヒマ・バシヨと称される条件である。

さらにもう一つ、地域的条件というものも考慮されなければならないであろう。これには、さしあたり家庭や保護者に関するものと地理的および気象条件に関するものがあるであろう。そこでこれらの教育条件を横軸に、そして学校体育の構造を縦軸においてマトリックスをつくると図-1のようになる。

以下では、現地で私自身が直接目にし、聞き取り、感じ取った中身をもとに、図-1の空ボックスのそれぞれを意識しながら報告していく。

	主体的条件			客観的条件				地域的条件	
	子ども	教師	コーディネーター	道具	施設	時間	情報	家庭・保護者	地理・気象
体育授業									
体育行事									
運動クラブ活動									

2. カンボジアの子どもたちに「体育の授業」を 1) 体育授業を教科として実施するための主体的条件 その1) 子どもたち

シェムリアップを中心に、市街地、市街地近郊、農村部の多くの小学校を訪問したが、そこで出会った子どもたちは、実に活発に遊びとスポーツに興じていた。成長途上の子どもたちの溢れんばかりのエネルギーは、高温多湿な気候などものともせず遊びとスポーツに向かわせていた。もし、体育の授業が学校の正課カ



リキュラムとして実施されていたら、彼らは運動学習に嬉々として取り組むであろう。子どものバイタリティは世界共通である。

その2) 教師たち

私が出会ったカンボジアの学校教師は、子どもたちのあの笑顔と活動的な姿とは対照的に、どこか疲れているような、誤解を恐れずに言えば、教師という仕事を楽しめていないような印象を持った。確かに教室での座学では、黒板を背に授業をしているのだが、その授業も「勢い」というものが感じられなかった。休憩時には先生同士が木陰で一休みしながら会話をしたりしていたが、子どもと



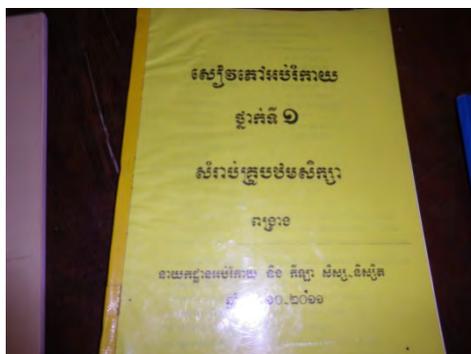
の会話を楽しんでいる風でもなく、中庭で子どもたちの遊びに加わったりという光景は目にすることはなかった。聞けば、教職による給与では家計が成り立たないため、ほとんどの教師は、始業前または就業後に副業を持っていて、したがって教材研究や指導力向上のための研修参加もままならないのが現状とのことであった。写真右上は、教育実習生が屋外のテーブルを囲んで各人が授業の準備をしている光景であるが、彼らもまた子どもたちと戯れ一緒に汗を流す光景は目にしなかった。

その3) コーディネーター

体育の授業は、ナショナル・カリキュラムレベルでは今年から正課に組み込まれたと聞いたが、実際には、学校レベルのカリキュラムが作成されていないのが現状であった。教育局では、日本の

NPOの支援のもと、小学校の学年別に体育シラバスを整備し（写真上段左：各学校にはまだ配布されてはい

ないが）、国内をいくつかの地域ブロックに分割して、それぞれに拠点校を設けて指導者講習会を開催しているとのことであった。しかし、そこで研修を受けた教員が地域で復伝講習をしながら各学校レベルにコーディネーターが位置づ



くまでには、なお年月を要するものと思われる。

写真右上は、教育実習生が子どもたちにバスケットボールのスタンディングからのミドル・シートを指導している光景。中段の写真2枚は運動遊び・ゲームを指導しているところだが、いずれも教育実習生が指導するも、担任教師の姿はそこにはなかった。他方、下段左の写真は、体育重点校で児童がサッカーをしている光景である。NPOの支援もあって子どもたちはユニフォームを着用し、スパイクシューズもはいていた。しかし、他の小学校とのあまりのギャップに、逆に不自然さをぬぐえない。ある部屋には、生徒が競技会で獲得したトロフィーがずらりと並んでいた。また校庭の片隅には固定遊具も設置してあった。コーディネーター（それは学校教員でなく、NPOスタッフの尽力かもしれないが）の存在がいかにか大きいかを物語る写真である。農村部の小学校に行くと、校庭には教師の姿は全くと言っていいほど見られなかった。そこにいるのは笑顔の額に汗を流している子どもたちだけであった。

2) 体育授業を教科として実施するための客観的条件

その1) 道具

正直なところ、私がこの度の探索的調査で一番強く感じたことは道具不足である。写真上段右は、シェムリアップ市街地にある大規模小学校（全児童数およそ5000名）の運動用工具箱である。短なわとびが10本程度（柄の部分



分は破損している)、ボールが大小合わせて12~13個程度（ほとんど擦り切れ寸前、空気の抜けた状態）、それにフライングディスクが数枚、それがすべてであるという。他に日本の大学の支援団がかつて提供してくれたビブス（ゼッケン付の色分け用ベスト）があった。写真上段左側は、近郊の小学校の運動用具

箱である。同じくこれが学校にあるすべてであると教えてくれた。箱の中身は見るも無残な状態である。穴の空いてないボールがわずかに1個残っているだけである。下段左下は農村部の小学校で、子どもたちが手にしているボールは擦り切れて大きな穴の開いたバレーボールである。これを使って校庭一杯にサッカーに興じていた。また校庭の片隅では、二本の木にロープを通してそれをネット代わりにして、上級生が破れたボールでバレーボールをしていた。写真右下に注目してほしい。わずかばかりの運動用具を箱に入れて、上級生に自主管理させている光景である。使いたい子どもは彼らの許可を得てから持ち出し、使用後は箱に収める。それを授業のない上級生が当番交代制で待機してチェックしているのである。すばらしい。

その2) 運動施設

運動施設も整備されてはいない。上段の2枚の写真は、大規模校の屋根つきテラスに設置された固



定遊具である。体育重点校にも鉄棒やシーソーなどが設置されていた。しかし、近郊や農村部の学校には固定遊具は皆無



である。また、運動施設となると、グラウンドと呼べる広さの校庭を所有している学校はほとんどない。私が確認できたのは、体育重点校と教員養成所の附属学校だけであった。下段左の写真は、大規模校の校庭（中庭）に設置された一対のバスケットボードである。コートは雨季に備えてかコンクリート張りになっている。その他の施設はもちろん整備されていない。他方、下段右のように、近郊や農村部の学校には広々とした空地のある学校もあった。強烈な太陽光と雨季が存在することを考えたとき、こうした空地を利用して屋内または屋根つきの体育施設の整備が望まれるところである。関係者によると、15m×25m程度の広さのスペー

スに柱を立てて屋根を設置するのに、日本円でおおよそ 20 万円程度の予算が必要になると教えてくれた。

その 3) 時間

すでに述べたとおり、ナショナル・カリキュラムレベルでは、体育授業は正課に組み込まれることとなった。したがって授業の時間を週間タイム・テーブルのどこかに位置づけることそれ自体は、学校当局とりわけ校長の判断一つで可能である。国の教育行政はそれを推奨しているのだから。つまり、体育授業のための時間は作れる。しかしそれには、現行の 4 教科に配分されてきた時間のどこかを削ることと引き換えである。つまり、教科体育に対する教育的意義とそれを実施することで得られるであろう教育的効果に対する、ある種の「納得」が学校関係者の中に共有される必要があるであろう。

教師が抱く指導への不安感や忌避感をどう乗り越えるか？も校長のリーダーシップに負うところが大きい。

その 4) 情報

新教科に対して教師が抱く指導への不安感や忌避感を払しょくす



るための一つの有力な手立ては、研修である。国レベルで作成されたシラバス（写真上段左）に関する伝達講習会や実技研修も兼ねた授業づくり講習会を地域レベル・学校レベルで開催することも必要であろう。その際には、参加する教師に対し、何らかのインセンティブを与えることも考慮されなければならないであろう。教師の待遇の現状に鑑みると、研修へのボランティアな参加を



呼び掛けるだけでは恐らく困難であろう。上段写真右側は、日本からの学生ボランティアが子どもたちとバスケットボールを楽しみながらゲームの合間に指導している光景である。女性教師が多いことも考慮すると、運動遊びや実施可

能なスポーツの魅力を伝える研修が第1歩になるように思う。また下段の写真は、教員養成所の附属小学校の校庭である。この養成所では新カリキュラムの導入を受けて、学生に体育の授業が実施されていたが、運悪くその様子を直接観察することはできなかった。このように考えると、体育授業の実施に向けて適切な情報を届けるべきは現職教師ということになるだろう。

3) 体育授業を教科として実施するための地域的条件

今回の探索的調査では、この点に言及するほどの情報を得ることができていないため、多くを語ることは避けたいが、いくつかは確認しておいた方がいいだろう。

その1) 気象条件

カンボジアには雨季と乾季があるが、乾季には強烈な太陽光が照り気温は40度を超える。子どもたちはその中でも嬉々とし



て遊びに興じていたが、屋内体育施設が未整備の中、女性教師が強い陽光のもとで体育を指導することはおよそ想像できない。また雨期になると洪水で学校ごと浸かるという。気象的な条件は最悪とまでは言わないまでも相当に厳しい。写真上段右は、トンレサップ湖の船上学校である。2回はプレイスペースになっており、周囲を落下防止の格子で囲んであった。



上段左の写真は屋根付のプレイスペースである。下段右の写真は、教室のテラスでビー玉遊びに興じている子どもたちの光景である。

その2) 家庭・保護者の条件

この点については調査が最も不足している。いくつかの写真を紹介しておく。まず、上段の2枚の写真であるが、右側は子どもの下校を校門の外で待っている保護者たちである。バイクでごった返していた。左側は、校内に駐車しているマイクロバス。同じ地区に居住する保護者が共同でチャーターし、集団登下

校をさせているとのこと。

中段の2枚の写真は、昼間に労働して家計の収入の足しにしている子どもたちである。午前部・午後部と二部制の学校体制を敷いているカンボジアでは、学校に行かないいずれかの半日に保護者の労働の手伝いをしている子どもも多いと聞いた。

下段の二枚の写真は、子どもたちが朝食をとっている光景である。校内の売店で食事をする

子（右）、テラスに座って家から持ってきた弁当を食べる子どもたち（左）。足元はみんな白い靴を履いているが、これは日本の民間から寄贈された靴で、学校が児童に配給したものであると説明を受けた。



3. まとめにかえて

ここまで、カンボジアにおいて体育授業を教科として実施する上でどのような条件の整備が求められているのかに関し、現状の一端に触れながら私見を述べてきた。ごく限られた情報に依りながらの報告なので、見当違いをしている可能性を心配している。

最後に、残る二つの柱の実現可能性について、言及しておきたい。

「カンボジアの子どもたちに体育行事を」

今回の探索的調査では、カンボジアの学校においてどんな行事が実施されて

いるのかについては、事情を知ることはできなかった。しかし、運動会やクラスマッチなどの体育行事は、なにも全校規模でなくても学年単位あるいは学級単位と、その規模を内容・方法を問わなければおそらく体育授業よりもっと実現の可能性は高いと推察される。その際、日本の学校で実施されているものをイメージする必要などないし、してはいけない。それぞれの学校が置かれた条件の中で可能な運営・計画が描き出せれば実施できるであろう。もちろんその場合も最低限の道具が用意されていなければならないことは言うまでもない。

「カンボジアの子どもたちに運動クラブ活動を」

運動クラブ活動は、カンボジアでも芽吹きつつあるのかもしれない。写真上段右側は、学校外のクラブ活動としてバレーボールクラブが練習をしている光景である。指導者は地域の人で元ナショナルチームの選手だった。下段右側は、学校のクラブ活動としてサッカーを練習している。この学校は対外試合で優秀な成績を上げているとのことであった（下段左）。また、上段左の写真は、小学校の鼓笛隊で練習に励む子どもたちが、私たちへの歓迎のために演奏してくれた時のものである。子どもたちの真剣な顔つき、演奏が終わった時の充実感に満ちた笑顔は、私たちに感動させるに十分であった。学校二部制をとっているカンボジアでは、運動クラブ活動の展開は、保護者の理解と指導者が確保されれば可能かも知れない。ただし、ここでも道具・施設の整備は不可欠であるが。



以上、この度の探索的調査で私が感じたことの概要を述べてきた。私たちにできる「支援」と「協力」の中身はどのようなことになるのか？それは未だはっきりとしていないが、少なくとも、日本の体育をそのままカンボジアに持つ

で行ったとしても決して効果を上げることはないであろうことは確認できた。今後、カンボジアの生活に根差した体育（＝生活体育）の可能性を探っていきたい。

V 今度の課題と展望

和泉研二

今回のプロジェクトでは、カンボジアの小学校および教員養成に関する現地調査をさらに進めるとともに、現地のニーズに沿った支援の試行として、教員対象に学校保健の講習会および課題解決型の理科授業を実施した。

保健室は通常の学校には存在せず、特別の教員資格もない。設置も強制はされていない。保健科教育は保健体育の時間内および理科と社会で一部を指導しているが、系統的な指導要領になっておらず、指導内容も整理されていない。

体育・スポーツ事情を改善するため、2003年、教育省に学校体育スポーツ局が新設され、昨年度まで体育は社会の一部であったが、本年度より一つの教科として独立した。指導要領に則った指導書も完成し、拠点校から近隣校への浸透を図っている。週2時間の体育授業の実施が義務付けられている。しかし、多くの学校では、施設や設備が揃っておらず、体育に関する理解も進んでいないため、朝礼の後に教室の前に並んでクラス毎にラジオ体操的なクメール体操という運動をしてから教室に入る程度の学校が多いとのことであった。

理科の教科書には、子供に実験を行わせるような記述はこれと見当たらない。従って、教員は授業中に実験する必要はない。当然、小学校には理科室もなければ、実験器具もない。カンボジアの理科の授業形態は、他の授業と同じく一斉授業である。教科書を読み、時々教師が質問し、生徒が答える。黒板に板書し、児童・生徒が書き写すという授業であり、理科室がなくても授業は進められる。理科室がないため、日本の小学校で行っているような理科実験をそのまま導入することは難しい。電気、ガス、水道を使わない観察実験を選別し、必要な器具の支援や、現地で入手し易い代替え教具の開発を支援することなどが当面の有効な支援を考える。

これまでのプロジェクト活動を通して、ワット・ボー小学校をはじめ、今後の活動の足場となり得る多くの学校とのつながりを持つことができた。また、

教育学部から延べ7人の教員が現地に出向き経験を積んだこと、その経験を学生に伝えることによって教育を通じた国際貢献への視野を広げる機能が徐々に強化されてきたことも成果の一つである。

現地では、学校保健・衛生面についての技能や設備・器具の支援、理科の授業実践や設備・器具の支援、教科となったばかりの体育の授業実践支援や施設・器具の支援を求めている。さらに地道な実績を積み上げていくことにより、近い将来、他機関との連携を図り支援の充実と強化を図りたい。

謝辞

本プロジェクトは、『国際協力活動推進プラットフォーム』および山口大学教育学部学部長裁量経費（平成22年度）からの資金援助によって実施した。実施に際し、終始励ましと適切なお助言を頂いた『国際協力活動推進プラットフォーム』代表の今津武氏（山口大学経済学部）に深く感謝致します。

現地では、ワット・ボー小学校のブン・キムチェン校長、田中千種校長補佐、マー・パーラー教諭、シムリアップ初等教育教員養成学校の Leav Ora 校長、小八重桂子隊員（JOCV）、渡辺大地隊員（JOCV）、現地での訪問校との調整や通訳にご尽力頂いた U.K. Vichidh氏（NCT New Cambodia Tours）をはじめ、多くの方々からご協力、ご援助を頂きました。また、本プロジェクトの先駆けとなった2008年のプロジェクト「カンボジア王国の学校教育と教員養成に関する現地調査」の代表であった阿部弘和教育学部元教授には、今回のプロジェクトの実施に際しても、終始、多大なご指導・ご支援を賜りました。心より感謝致します。